佐伯地区遺跡群発掘調査概報　Ⅳ

# 栂牟礼（とがむれ）城址と関連遺跡発掘調査概報　Ⅳ

1993

佐伯市教育委員会

# 例　言

1. 本書は佐伯市教育委員会が国庫および県費の補助を得て実施した大分県佐伯市所在の佐伯地区遺跡群の概要報告書である。
2. 調査は大分県教育委員会文化課の指導・支援を受けて実施した。
3. 栂牟礼城の現地調査に際し、千田嘉博氏(国立歴史民俗博物館助手)の指導を得、玉稿を賜ることができた。
4. 出土遺物の鑑定では大橋康二氏(佐賀県立九州陶磁文化学芸課長)から多くの御教示を得た。
5. 遺構・遺物の実測は宮内克己・原田昭一が行った。本文の執筆は宮内・原田が分担して行い、文末に執筆者名を記した。
6. 本書の編集は原田があたった。

# 目　次


Ⅰ　はじめに……1
　1.　調査団の構成……1
　2.　周辺の歴史的環境……2
Ⅱ　遺跡の調査……4
　1.　木立地区の調査……4
　2.　栂牟礼城址の調査……6
　　(1)　主郭(通称、本丸)の調査……6
　　(2)　曲輪2(通称、二の丸)の調査……8
　　(3)　曲輪3(通称、展望台)の調査……8
Ⅲ　まとめ……12
付論　栂牟礼城の構成……14

# Ⅰ　はじめに

栂牟礼城は平安時代末から戦国時代にかけて佐伯荘の領主であった大神姓佐伯氏が築城したものといわれている。その築城の時期は明らかでないが、近世初頭に記された『大友興廃記』や『栂牟礼実録』によれば16世紀前葉には確実に存在していたことがうかがえる記載がみられる。

これまでは、佐伯氏の居館推定地や旧城下町の実態を明らかにするため、栂牟礼山東麓地域を中心に３次にわたる試掘調査を行ってきた。部分的な試掘調査であったため必ずしも調査対象地の遺跡の様相を具体化しえるものではなかったが、中世の遺跡が存在することを立証しえる結果が得られた。

今年度は栂牟礼山系の城郭遺構の一端を明らかにするため、主郭（通称、本丸）、曲輪２（通称、二の丸）、曲輪３（通称、三の丸）の試掘調査を行い、将来の遺跡保存の手掛かりとなる調査結果が得られた。

また、昨年度に引き続き、県営圃場整備事業の事前調査として木立地区の試掘調査もあわせて行った。

## 1.　調査団の構成

| | | |
|---|---|---|
| 調査主体 | 佐伯市教育委員会 | |
| 調査指導員 | 別府大学教授 | 後藤宗俊 |
| | 早稲田大学助教授 | 海老沢　衷 |
| | 国立歴史民俗博物館助手 | 千田嘉博 |
| 調査員 | 大分県教育庁文化課 | |
| | 主幹兼埋蔵文化財第一係係長 | 清水宗昭 |
| | 埋蔵文化財第一係主査 | 宮内克己 |
| | 同　主任 | 原田昭一 |
| 調査事務 | 佐伯市教育委員会 | |
| | 教育長 | 鳥井喜久太 |
| | 社会教育課課長 | 田嶋栄治 |
| | 社会教育課課長補佐 | 大賀重行 |
| | 文化係係長 | 野口俊一 |
| | 副主幹 | 山田健一 |

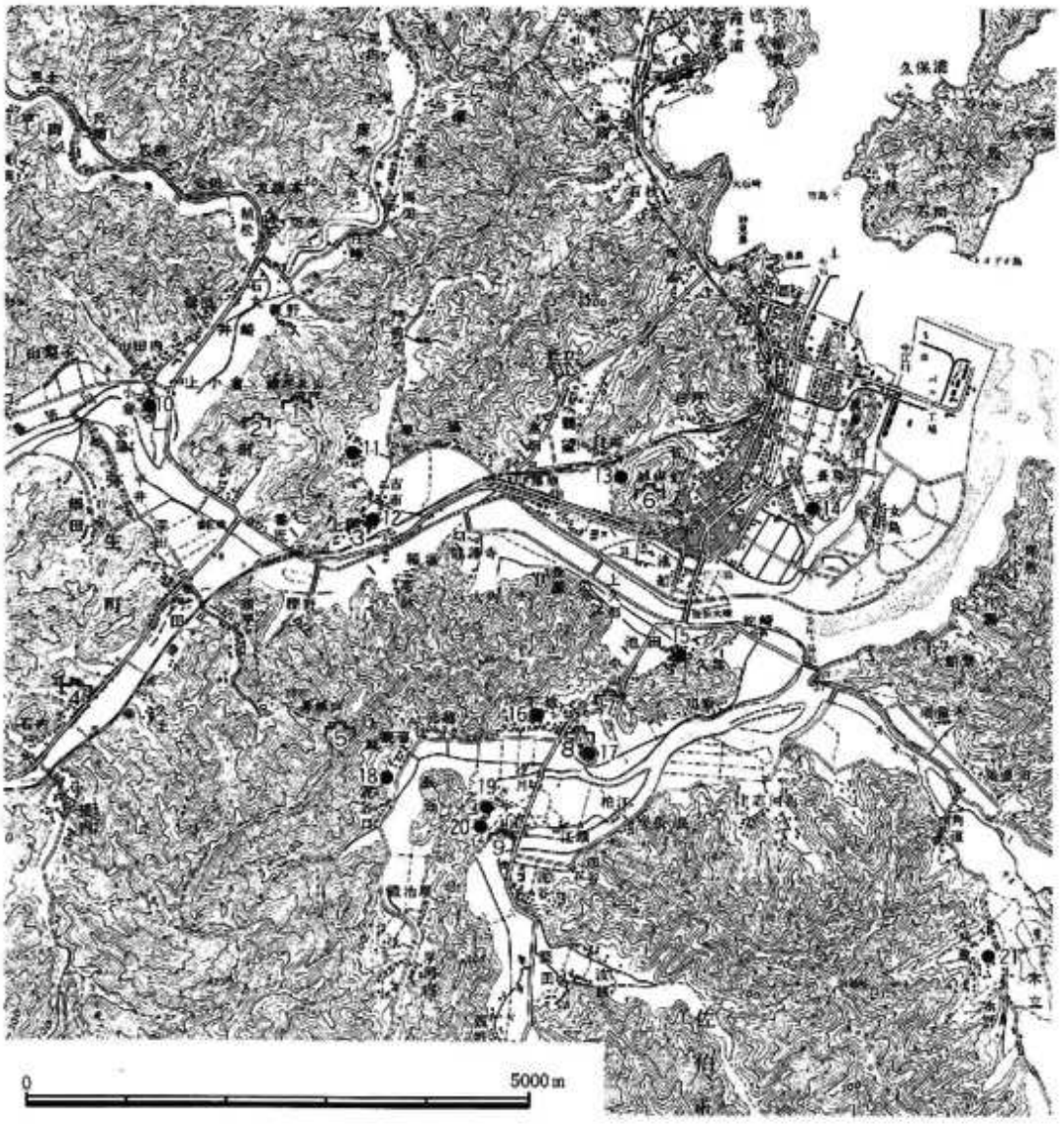
## 2. 周辺の歴史的環境

佐伯市は大分県東南部に位置し、近世に入部した毛利氏の城下町として栄えた。豊後水道に面したリアス式海岸の湾奥に広がる平野部には市街地が広がり、山間部を流れる番匠川・堅田川流域の狭隘な平野部を利用して水田としている。現市街地の平野部はかつてはリアス式海岸部であり、東島古墳・宝剣山古墳など、古墳時代の墳墓は島部に営まれ、海との関連性が強くうかがえよう。

これに先行する縄文時代～弥生時代の遺跡をみると下城遺跡・長良貝塚・白潟遺跡など旧海岸線沿いと考えられる標高10～20ｍの山麓および台地上に位置しており、原始・古代における佐伯市は生業の場として平野部とのつながりがうすいことがわかる。

奈良時代に至ると『豊後国風土記』の記載から、当地は海部郡穂門郷に属しており、その住民のほとんどが海辺の白水郎(あま)であったことがわかる。また、平安時代の『本朝世紀』では天慶４(941)年に藤原純友の乱に際し、純友の次将である佐伯是本が「佐伯院」を襲撃したとの記載がみられる。「佐伯院」とは当時、郡大領(郡家)に管理されていた官倉・倉院に関する地名であると考えられているが、これらの地域は荘園化により、佐伯荘に編入され、平安時代末以降、16世紀の大友氏没落まで、佐伯氏十四代の領地となり続けた経緯がある。

鎌倉時代、弘安８(1285)年の豊後国図田帳によれば、佐伯荘の本庄が佐伯氏宗家、堅田村が佐伯氏一族により分領されていたことがわかるが、栂牟礼城周辺に目をやると弥生町上小倉の磨崖石塔群(鎌倉時代末～南北朝時代の記年銘がみられる)、佐伯市鶴岡地区の石塔群、佐伯市上岡地区の十三重塔(鎌倉時代)など佐伯氏の勢力下において造立されたと思われる石塔物から佐伯荘の様相の一端が窺い知れるであろう。また、この栂牟礼城周辺には木戸城、小山田城などが存在し、番匠川を挟んで南岸部にも中山砦、八幡山城、宇山城、高城、竹田城など栂牟礼城の支城とも思われる施設が散在している。




1 栂牟礼城　2 小山田城　3 木戸城　4 竹田城　5 高城
6 鶴屋城　7 中山砦　8 八幡山城　9 宇山城　10小倉磨崖塔
11曳地　12十三重塔　13白潟遺跡　14宝剣山古墳　15岡ノ谷古墳
16下城遺跡　17岩清水古墳　18高城館　19長良貝塚　20汐月遺跡
21木立地区

**第1図　栂牟礼城址周辺遺跡分布図**

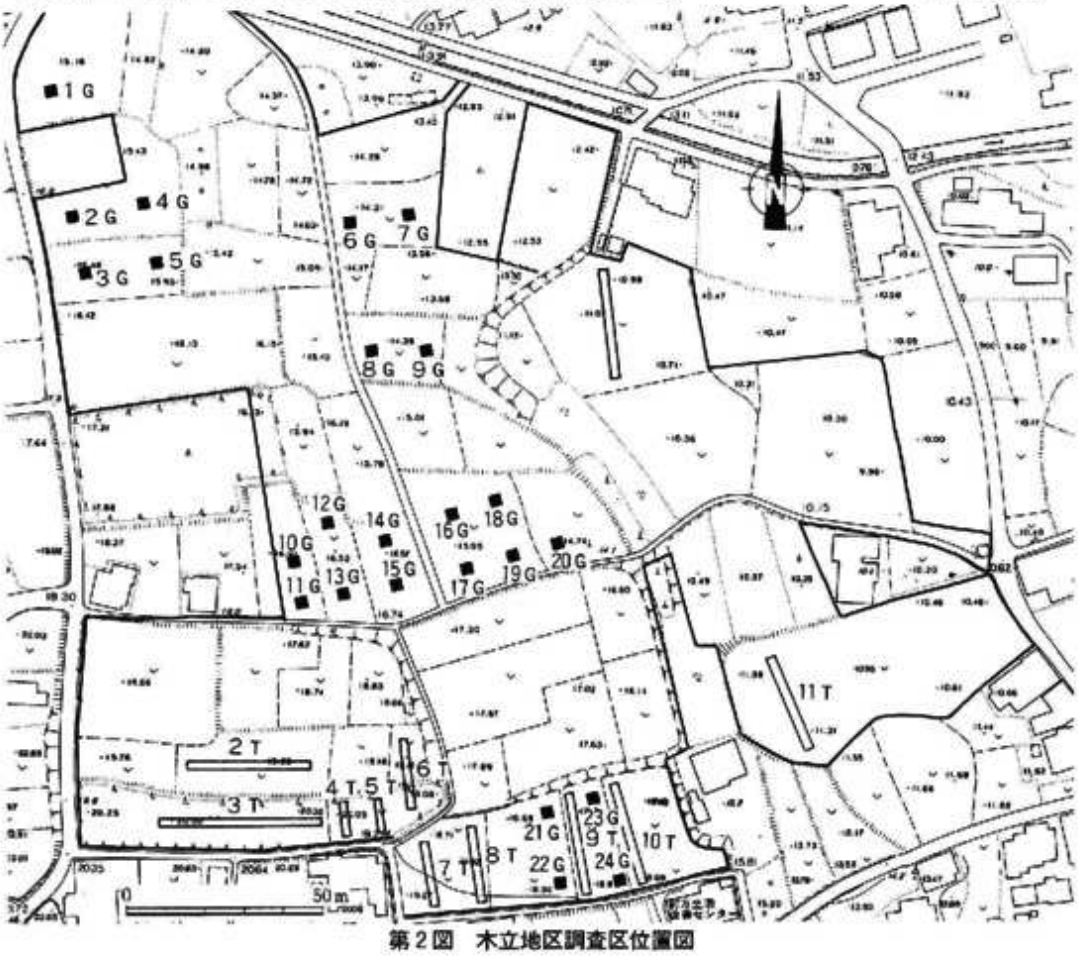
# Ⅱ　遺跡の調査

## 1.　木立地区

木立地区は、佐伯市の東部を北流する木立川の中流左岸に位置し、一帯の標高は約20～11ｍを測る。今回調査の対象となった桟敷地区は、南北を小谷部に挟まれた丘陵裾部にあたり、比較的平坦な地形を呈することから遺跡の存在が予想される地域であった。

調査は、圃場整備事業によって削平を受ける部分を対象とし、３×３ｍのグリッド計24、幅約1.5ｍのトレンチ計11を地形等を勘案し設定して行なった。調査面積の総計は 568㎡である。

調査の結果、１～９グリッドでは地表下約20～50㎝余で淡茶褐色の地山が現われ、遺構は一部近世以降の柱穴と考えられるものを除きほとんど検出されなかった。10～20グリッドでは表土、黒色土（黒ボク）の下に層厚15～20㎝余のアカホヤ火山灰土が堆積する部分も認められたが、表土層を除き遺物は全く出土せず遺構も認められなかった。また、21～24グリッド、１～11トレンチにおいても同様であり、工事の実施にあたり問題ないと思われるが、表土層からは比較的大形の土器片も出土しており周辺の対応は慎重を要する。　（宮内克己）




第２図　木立地区調査区位置図

3 トレ調査状況

5 G完掘状況

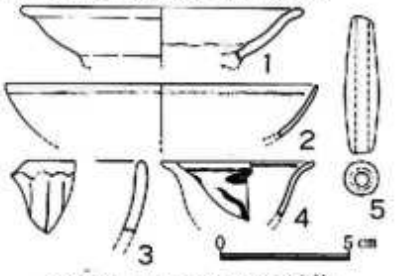
## 2．栂牟礼城址の調査

栂牟礼城は標高 223.7ｍの栂牟礼山山頂部を中心に東西 1.5km、南北 2.3kmにわたり縄張りが広がる山城である。その縄張り配置は小野英治氏の精力的な踏査により確認された箇所が大部分であるが[1]、近年の航空写真測量図の作成により縄張りの全貌が把握できた。

その縄張りは頂上部を利用した主郭を中心に南側に伸びる尾根上を利用して曲輪を造成している。主郭と曲輪２の間には堀切を挟んで武者溜が２段に造成されており、さらに曲輪２との間に堀切がもう１本掘削されている。曲輪２はその面積が 1900㎡をこえ、栂牟礼城の縄張り中、最も広い面積を有する平坦地であり、中央部には盛土状の高まりが２カ所みられる。曲輪２の南側には比高差 22ｍの急斜面下に堀切が掘削され、その前面の武者溜を挟んで曲輪３が造成されている。曲輪３はわずか 190㎡を測るのみであるが、その南側尾根上には堀切が５本掘削されているうえ、東側斜面に８本、また西側斜面に１本の竪堀がそれぞれ掘削されており、狭い空間ではあるが、曲輪３の栂牟礼城攻防における位置付けの重要性がうかがえる。このほかにも曲輪２から小山田城にむかう尾根上には曲輪が数段形成されており、堀切・竪堀が幾重にも掘削されていることや、主郭から北側に２本のびる尾根上にも数本の堀切がみられ、その縄張り範囲の広さもさることながら体系立った防御施設の配置には目を見張るものがある。

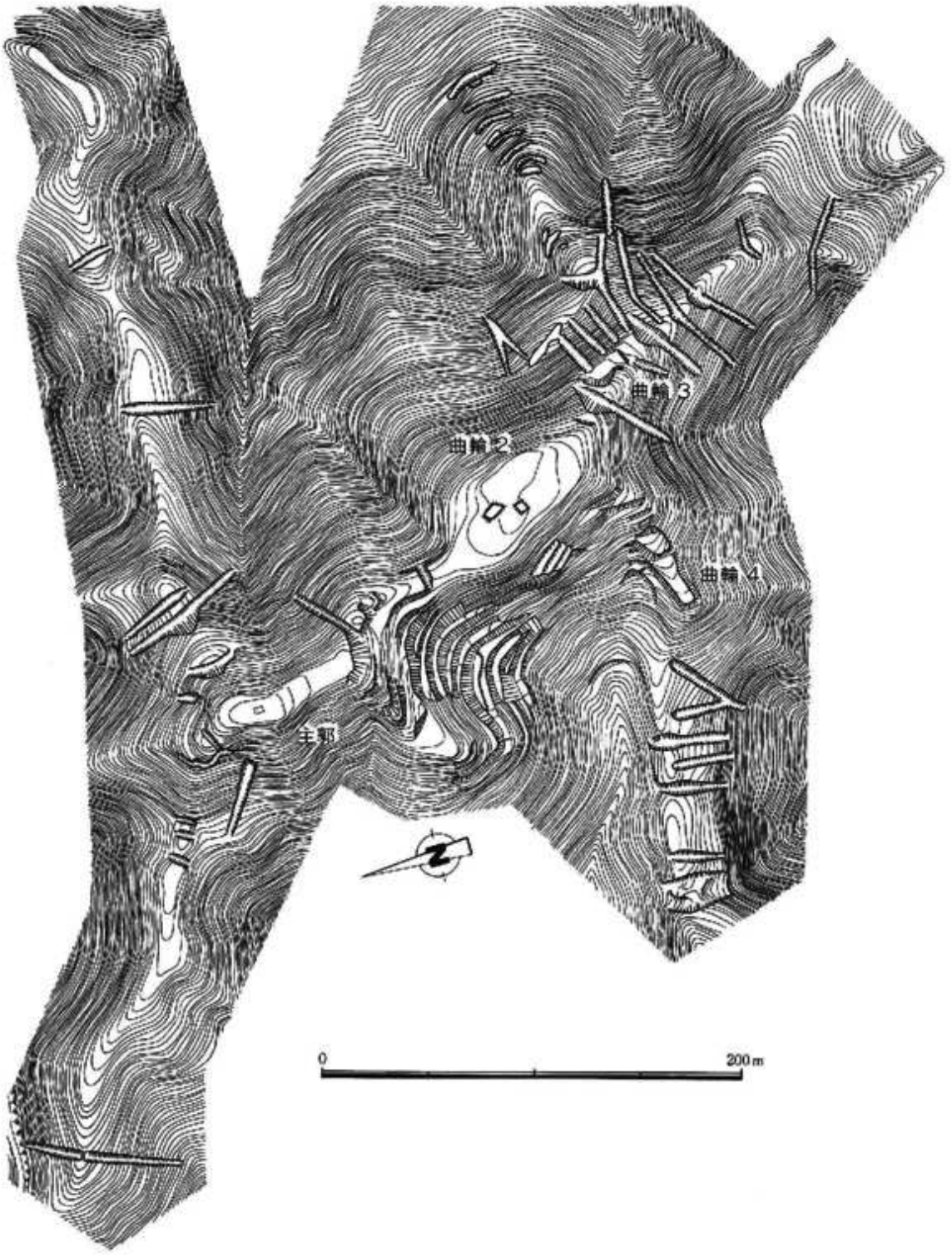
### （1） 主郭（通称、本丸）の調査

主郭は10×65ｍを測る栂牟礼山頂上部の平坦地であるが、今回は曲輪２に面する南端地点に縦 9.5ｍ、横７ｍ、幅２ｍのＴ字状のトレンチを配した(第８図)。ここでは地表面精査の段階から土錘・備前焼大甕片などの遺物が表面採取されており、深さ約 10cmで岩盤に至るが、部分的には岩盤が露頭している箇所も認められた。それゆえ出土遺物である備前焼大甕片・白磁片・中国産染付片・青磁片・瓦質土器火鉢片・土錘などは地表面ないしほとんど地表面に近い表土層から検出されており、埋土も岩盤を整地のために削平した際に出た多量の角礫を多く含み、山城築造期の地表面と現地表面はほぼ同じであることがわかる。



第３図　10トレンチ出土遺物

出土遺物は第３図にあらわした。１は白磁皿である。復元口径11cmを測り、体部はゆるやかに丸く伸び、口縁部は端反りの形態を呈する。白濁した厚めの釉が内面見込み部を除き全面に施されており、釉には細かい貫入がはいる。２は復元口径 12cmを測る染付皿である。体部は内湾気味に口縁に至り、内外面口縁付近に界線が１条ずつはいる。３は青磁碗である。体部外面にはヘラ描きによる細描蓮弁文であり、蓮弁文は細線と剣頭が蓮弁としての単位を意識して施されている。４は染付小坏であり、復元口径６cmを測る。体部は内湾気味に立ち、口縁部は端反りを呈する。口縁付近の内外面に界線が１条ずつみられ、外面の界線以下に染付の文様が施されている。



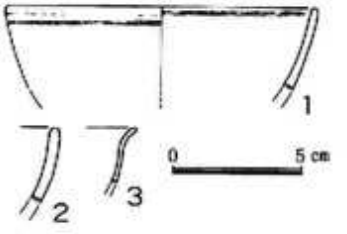

第4図　栂牟礼城址の縄張り配置図

（2） 曲輪2（通称、二の丸）の調査

曲輪2には合計8カ所のトレンチを配した（第8図）。いずれのトレンチにおいても深さ20cmにおよばず地山あるいは岩盤に至り、いずれのトレンチにおいても明確な遺構の確認は果たし得なかった。特に2×6mの7トレンチを設定した高まりはこれまで村田修三氏によりくい違い虎口とし、土盛による遺構ではないかと想定されていたが[2]、調査の結果、厚さ10～15cmの表土下において地山が確認でき、人工的な盛土ではないことが明らかとなった。ただ、曲輪2は全域ほぼ平坦地をなすが、中央部の高まりは異質であり、地山削平により平坦地を造成したもののなぜこのような高まりを残す必要があったかに関しては明確な結論は出し得なかった。なお7トレンチにおいても遺構は検出できず、柱穴間の幅を想定した場合、この高まりには櫓などの掘立柱建造物が存在していた可能性は極めて低いものと思われる。曲輪2の各トレンチからはほとんど遺物の出土はみられなかったが、1トレンチにおいて備前焼大甕片、9トレンチにおいて備前焼大甕片、白磁片、染付片が少量であるが地表面ないし表土中から発見されている。この曲輪2においても主郭と同様に梶牟礼城築造時からさほど土層の堆積はみられなかったものと思われる。

曲輪2近景（北から）

7トレンチ調査状態



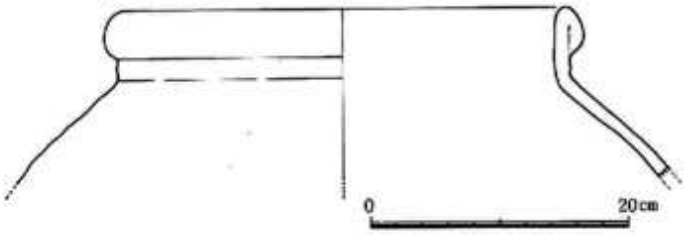

第5図　9トレンチ出土遺物

曲輪2出土の遺物は第5図に示した。1は復元口径12cmを測る染付碗であり、体部は内湾気味に立ちあがる。釉には細かい貫入がみられ、口縁付近の内面に幅広の界線1条、外面には上部に細い界線1条、下部に幅広の界線1条みられる。2は白磁碗であり、釉には細かい貫入が多くみられる。3は白磁皿あるいは小坏であり、釉は淡灰色を呈する。

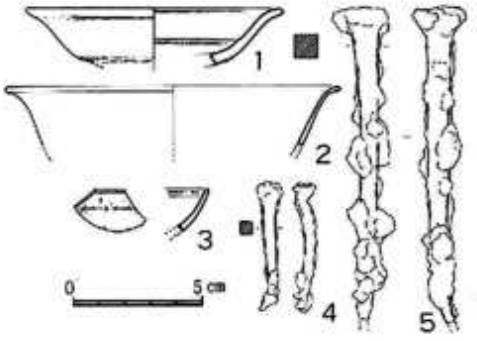
（3） 曲輪3（通称、展望台）の調査

曲輪3にはほぼ3×5.5mのトレンチを設定した（第8図）。深さ約35cmを測る地山まで表土のみからなり、地山上において径20cm、深さ20cmのピットを1基確認した。表土中からはトレンチ内に散在した状態で備前焼大甕片が比較的多量に出土したほか染付片、白磁片ならびに鉄釘が2点確認されている。

曲輪３出土の遺物は第６・７図に示した。第６図は備前焼大甕である。復元口径35cmを測り、口縁外面の玉縁は下方に長く垂れる。第７図１は染付皿である。復元口径10cmを測り、体部がゆるやかに内湾しながら伸び、口縁部は端反りを呈する。体部内面には段を有し、内面の界線は口縁直下と段の直下に１本ずつ計２本が施されている。また外面には口縁直下と底部付近に１本ずつ計２本の界線がみられる。釉は厚く施されており、細かい貫入が多くみられる。なお外面下半部は露胎のままである。２は白磁皿である。復元口径13cmを測り、口縁部は端反りを呈する。３は染付皿である。内面には口縁直下に２本の界線が、また外面には口縁直下に１本の界線がみられ、以下に染付文様が施されている。４・５は鉄釘である。４は断面四角形であり、推定全長５cm内外を測る。なお、頭部は直角に曲げられている。５も断面四角形であり、推定全長13cm内外を測る。なお、頭部は観方形を呈する。　（原田昭一）



第６図　８トレンチ出土備前焼大甕



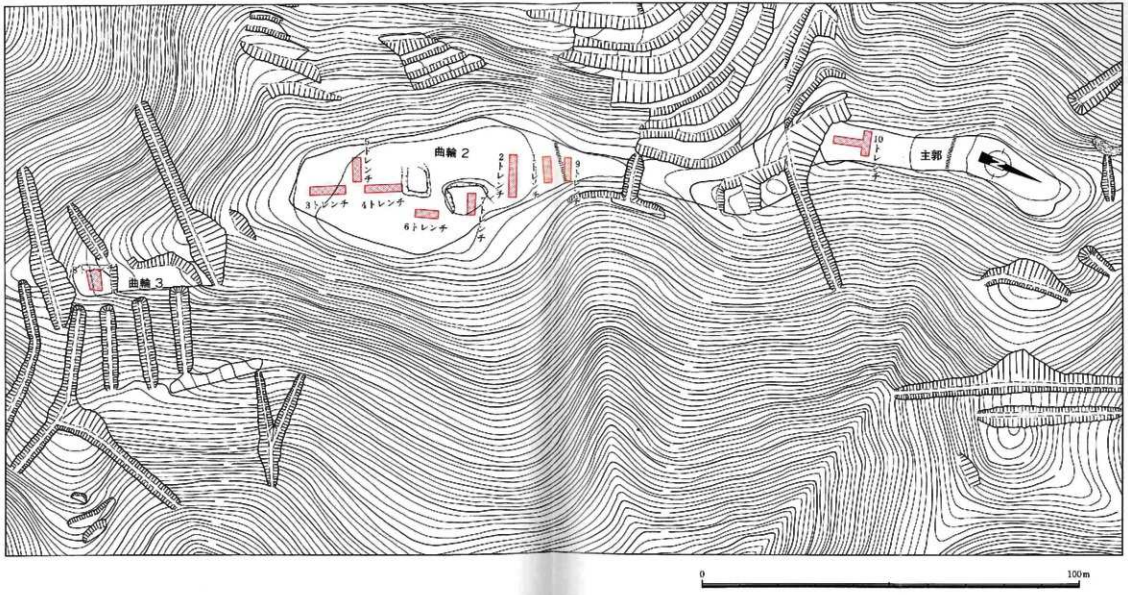
第７図　８トレンチ出土遺物

８トレンチ遺物出土状態

註

(1)　小野　英治「栂牟礼城の規模と構造」（『佐伯史談』第122号 佐伯史談会 1980年）

(2)　村田　修三「栂牟礼城」（『図説中世城郭事典』３　新人物往来社 1987年）




第8図　柳牟礼城址トレンチ配置図

## Ⅲ まとめ

今回、栂牟礼城址の調査は主郭をはじめ主要な曲輪においてどのような遺構遺物がみられるか、トレンチ調査により実態の把握を試みた。各トレンチ調査により主郭および曲輪２は本来の丘陵尾根の高まりを掘削し、岩盤に至るまでも削平の対象としている事が明らかとなった。ただ、岩盤が角礫からなり、しかも表土自体、掘削の際にでた多量の細かい角礫を含むため遺構の検出は困難を極めた。今後、主郭および曲輪など各平坦地全面の調査を行うとすれば、その遺構の存在ないし配置の具体像が浮かび上がってくることでであろう。また遺物の出土状態からみた場合、主郭および曲輪２では地表面ないしほとんど地表面に近い表土層から出土しているため、栂牟礼城廃絶以降ほとんど土の堆積は行われなかったものと思われる。

本城は『大友興廃記』によれば大永７(1527)年10月上旬より、臼杵長景が率いる二万余の大友軍に対して籠城戦を開始したものと考えられる。そして大友義鑑から久保中務丞に宛てた「大友義鑑感状」によれば11月13日には落城していたものと考えられるため、約１カ月にわたり栂牟礼城での攻防が行われたことがわかる。また、『豊薩軍記』によれば天正14(1586)年、島津軍の豊後侵攻に際して、同年10月23日に栂牟礼城に来た島津軍の勧降使を斬り、栂牟礼城を拠点に島津軍の侵攻が予想される諸方面に部隊を配し、同年11月４日、佐伯堅田地区において島津軍との合戦におよび、栂牟礼城での籠城策を取らなかったことがわかる。史書において栂牟礼城に関する記録がみられるのがこの２回のみであるが、その築造時期も明らかではなく、中世長きにわたり、いつ時期どのように使われていたかは考古学的発掘調査にたよるしかない状況にある。

今回の発掘調査においては少量ながら出土遺物を観察すると、備前焼甕は間壁忠彦編年のⅣ期の資料であり[1]、15世紀から16世紀前半にかけておさまることがわかる。また、外面に細線蓮弁文が施された青磁碗は上田秀夫編年のＢ―Ⅳ類におさまり15世紀後半から16世紀前半を中心に16世紀を通じてみられる[2]。さらに白磁類は口縁部端反りの形態をもち、森田勉分類のＥ群におさまり、16世紀を通じてみられる様相を示す[3]。染付に関しても小野正敏分類の染付皿Ｃ群(碁笥底を呈す)、染付皿$B_1$群(高台をもつ端反り皿)など15世紀後半から16世紀前半の資料がみられるほか、染付皿Ｅ群(低い内湾した胴をもつ高台つき皿)など16世紀後半にのみ出土する染付も含まれる[4]。

以上の出土遺物の帰属時期を整理した場合、若干ではあるが、15世紀後半から16世紀前半におさまる一群と、多数の16世紀後半におさまる一群に分けられよう。そこで史書にみられる栂牟礼城に関する記述から、籠城策におよび１カ月にわたり山上にて攻防戦を行った大永年間の戦に際して城内で使用された土器群が前半期に位置付けられる一群に対応し、また、栂牟礼城本体における戦闘の状況が明らかでない天正年間の戦いに伴う土器群が後半期の一群に対応す

る可能性が高いと考えられよう。また、それぞれの遺物の出土地点を検討した場合、新相の遺物は主郭・曲輪２・曲輪３のそれぞれの調査地点から出土し、特に曲輪３からは新・古相それぞれ比較的まとまった出土量がみられた。それゆえ大永年間の戦で山上に籠城していた証左になりえるものであろうし、特にその戦闘の実態が明らかでない天正年間の戦では幾重にも堀切・竪堀により防禦堀施設をととのえた曲輪３において熾烈な戦いが行なわれたことを物語るものであろう。

以上、栂牟礼城址の発掘調査の成果について記述してきたが、栂牟礼城址に関しては地元の先達である小野英治氏の地道な基礎調査によるところが大変多く[5]、このような小野氏の業績があるがゆえ今回の調査結果も栂牟礼城研究において生かされてくるものと思える。

（原田昭一）

註

(1) 間壁　忠彦・間壁　葭子「備前焼研究ノート(3)―備前焼窯址の分布とその性格―」（『倉敷古館研究集報(5)』　1968年）

間壁　忠彦『考古学ライブラリー60　備前焼』ニュー・サイエンス社　1991年

(2) 上田　秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』第２号　1982年）

(3) 森田　　勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」（『貿易陶磁研究』第２号　1982年）

(4) 小野　正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究』第２号　1982年）

(5) 小野　英治「栂牟礼城の規模と構造」（『佐伯史談』第122号　1980年）

小野　英治「栂牟礼城」（『日本城郭大系』第16巻　1980年）

なお、栂牟礼城曲輪３から採取した備前焼の表採資料を江藤磯吉氏より佐伯市教育委員会に寄贈いただき、また、栂牟礼山踏査の際には加嶋銀一・藤田喜代一・木許寛各氏にご案内いただいた。記してお礼申し上げます。

また、発掘調査には以下の方々にご参加いただいた。あわせてお礼申し上げます。

石井　妙子　　一瀬カツノ　　太田　節子　　小田　　誠　　神崎　　勉　　清田　静馬
北野　　郁　　北山　直之　　染矢　友男　　竹島　敏雄　　長田　留六　　広瀬　義夫
前田美津子　　松下　恒雄　　三重野正夫　　森崎　正弘　　（敬称略、五十音順）

付 論

# 栂牟礼城の構成

千 田 嘉 博

栂牟礼城は標高223m、比高200mの峻険な山頂にあり、周囲を一望し河川、街道を押さえる要衝に立地する。山頂の遺構は完全に遺存しており、保存状況はきわめて良好である。地表面観察の結果、最終段階の栂牟礼城は曲輪を等質的に連ねたのではなく、相互に機能分担をさせながら高度なプランを実現したと評価された。そこで構成の要点を検討する。

主郭は城域西側端に位置し、最高所を占める。上下２段の削平地からなるが、いずれも幅が狭く、居住性を備えた建物を築くことはむつかしい。城内防戦の中枢「詰め丸」に相当した実戦的空間であったと思われる。ここは南北尾根筋からの攻撃に備えるためにも重要であった。現在も神社が所在するが、精神的なよりどころとして城のあった時代から、宗教的施設があった可能性も考えられる。

曲輪２は城域中央を占める、最も面積の大きい曲輪である。城主クラスの山城内の屋敷が備えられたのはこの曲輪と推定され、中心的な居住機能を発揮したと考えられる。曲輪中ほどには２つの土塁状の盛土が認められる。現在は風倒木が重なり、詳細を観察することができなかった。これを村田修三氏はくい違い虎口と評価している〔(村田「栂牟礼城」(『図説中世城郭事典』３.新人物往来社.1987)。村田氏の観察によれば、この土塁によって曲輪内は南北２つに区分されていたことになる。〕

佐伯市教育委員会の測量図では矩形の土壇と図示され、虎口とは評価できない。しかし単純な櫓台としては、曲輪中央に２つの土壇が近接するという、位置の疑問が残る。土壇が後世のものでないとすれば、村田説が合理的解釈といえよう。今後、発掘調査によって土塁の機能が解明されることが期待される。

主郭と曲輪２の南斜面には10段ほどの帯曲輪がある。ここを含め一帯の斜面はかなりの急傾斜で、防御上特に不安なところではない。だから帯曲輪は防御より、スペースを確保するためにつくられたと考えられる。城兵の駐屯場所などとして機能したと推測できる。

中心曲輪群の東西と南の尾根には堀が集中的に配置されている。防御の焦点となる主尾根東部分には12本の堀切り・竪堀が連続する。登攀ルートとしては唯一と思われる各尾根筋の防御に、この城がいかに苦心したかわかる。ことに曲輪３の北斜面に連続する５本の竪堀は、竪堀と竪土塁を築き並べた畝状空堀群と判断される。

この畝状空堀群がつくられた場所はかなりの急斜面である。しかしその下に小規模な派生尾根があり、緩傾斜となることへの配慮であろう。空堀群の直上には前後を比高差の大きい堀切

りで守られた曲輪3があり、きわめて強い防御空間を実現している。

このように栂牟礼城は中心・居住機能を重視した中心郭群と、堀切り・竪堀を存分に配置し、防御機能に主体を置いた周辺郭群の、二重の構造をもっていた。しかし普請による虎口部の特定化や、横矢掛け・横堀・土塁による中心曲輪の求心力強化は実現されていない。これらは築城主体の権力のゆるやかな支配をうかがわせる。

現在、地表面から観察される最終段階の遺構の成立年代は、畝状空堀群の存在から天正年間(1573～91)と推測される。さらにこの地域の政治状況と考え合わせれば、島津氏の攻撃を佐伯惟定が防いだ天正14年(1586)年頃の可能性が最も高いと思われる。これ以前の大永7年(1527)の栂牟礼合戦段階の遺構は、単純な削平地と堀切りを主体とした城郭と推定できる。しかし地表面観察からは積極的に古拙とすべき点は指摘できず、具体的な様相の解明は発掘調査の成果を待つしかない。

栂牟礼城は規模の大きな遺構が完全に保存されている上、詳述はできなかったが小田山城など周辺の出城との関係が明瞭で貴重である。そして畝状空堀群などの特殊遺構の伝播と発達を考えるにも最適である。さらにこれら遺構の年代観と文献の示す年代が一致する。これより栂牟礼城は当該期の山城を立体的にさぐることができる、一級の基準資料ということができよう。

現在、地元の集落では年に2回、総出で登山道の整備に努めていると聞く。このような城跡と地域住民のあたたかいつながりに支えられて成立する栂牟礼城跡が、これからも適切に保存され、地域のひとびとの精神的中心として生きつづけることを願いたい。栂牟礼城を遺跡として解明するためには城下部分との一体的な研究が行われ、城下町の全体像を提示する作業が不可欠である。このための地籍図分析や航空写真判読、通称地名の採録など、残された課題は大きい。

(せんだよしひろ／国立歴史民俗博物館　考古研究部)

栂牟礼城址と関連遺跡発掘調査概報Ⅳ
佐伯地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ
1993年3月31日

発行　佐伯市教育委員会
〒876 佐伯市中村南町1-1
☎(0972)22-3111番

印刷　日の丸印刷株式会社
〒874 別府市中央町9-15
☎(0977)22-0341番